

じ かん

三世代で読みたいふるさとアルバム

りょこう

写真で旅する洞爺湖有珠山ジオパークでの暮らし

はじめに

世代をつなぐ
ふるさとの風景で
とっておきの
〈時間旅行〉

私たちが毎日見ている洞爺湖は、
遠い昔に巨大噴火^{きよだいふんか}でできた大穴に
水が貯まってできたもの。

想像もつかないほどの長い長い年月をかけて
いまの私たちがよく知っている洞爺湖になりました。

噴火湾や洞爺カルデラ、
あちこちに息づく大地の物語は同時に、
火山とともに暮らし続けてきた
私たち住人の物語でもあります。

おじいちゃんが子どもだったころの暮らしが、
おかあさんが「あの日」見つめた風景、
ぼくやわたしが学校で聞いた有珠山噴火のこと。

本誌では、そうした世代をつなぐふるさとの記憶を
今昔の写真でふりかえる構成でお届けします。
あひだ

「洞爺湖有珠山ジオパーク」で暮らす
私たちだからこそ知っておきたい、
とっておきの時間旅行をお楽しみください。



1805(文化2)年、「有珠・虻田牧場」の開設を記念して建てられた「入江馬頭観世音碑」は北海道最古の馬頭観音碑(馬の守護を祈った碑)といわれている。
 1822(文政5)年、有珠山噴火で大量の火砕流により牧場管理人や多くのアイヌの人々が犠牲になり被害を受けたと歴史にある。



洞爺湖町の先史は縄文時代にまでさかのぼる。入江・高砂貝塚では縄文時代の遺跡が発見されている。縄文人の貝塚は特別なもの、たんに「捨て場」ではなく、アイヌ文化に見られる神聖な「物送り場」の意味を持つと考えられる。



はるか遠い昔から
 縄文の時代から大地と人の二人三脚



明治30~40年代の入植期、旧洞爺村から見る中島。人家はまだ数えるほど。

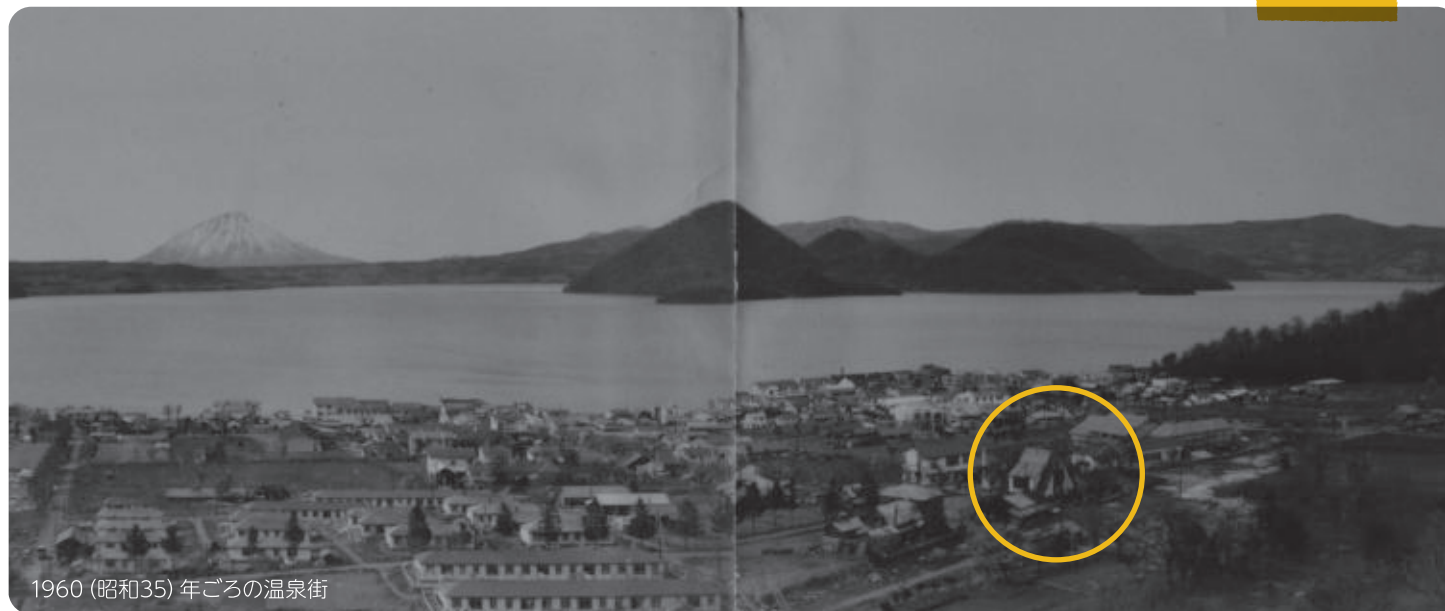


1906(明治39)年の本町地区。写真右上に煙をあげる蒸気船が見える。明治30年代ごろから虻田は内陸に入る開たく者たちの中継地として急速に発展した。



明治40年代の温泉地区。湖の向こうは羊蹄山。探検家松浦武四郎(明治2年開拓判官)が訪れ、絶賛した景色

私たちの身のまわりにある風景は、いつも動き続けています。有珠山もそうですし、洞爺湖もそう。人間の一生と同じで、長い年月をかけて姿を変えていきます。遠い縄文時代から始まる大地とひとの二人三脚は、現在まで続いていきます。二人三脚の相棒は、大きくて豊かなこの大地。はるか昔の噴火でつくられたカルデラが、私たちのふるさとです。



1960 (昭和35) 年ごろの温泉街

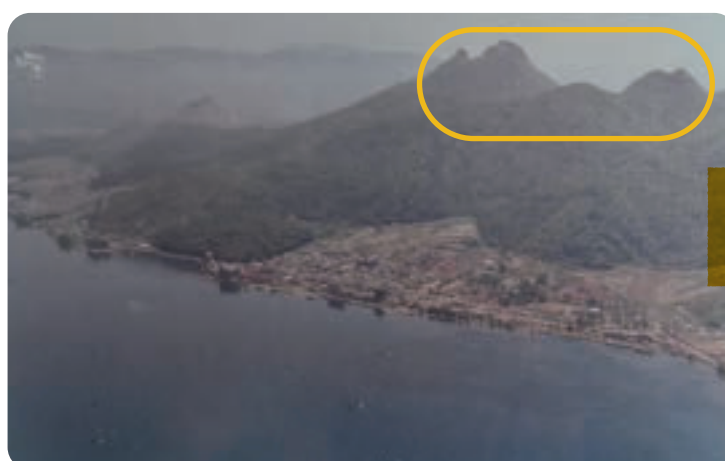
三角屋根の電鉄駅舎は1941 (昭和16) 年に廃業していたが、役目を終えた後もしばらくは温泉街のシンボリックな存在として残された。1949 (昭和24) 年、[洞爺] の名は支笏洞爺国立公園に指定され、全国に広く知られるようになった。



1929 (昭和4) 年、洞爺湖電気鉄道が洞爺湖温泉と虻田駅間に開業。開業当時の洞爺湖駅舎



1928 (昭和3) 年、長輪線 (現在の室蘭本線) 開通。虻田駅に停車する一列車



1973 (昭和48) 年ごろ (写真右) と、2007 (平成19) 年の温泉地区。有珠山のかたちを比べると噴火による変化が見てとれる。

洞爺湖温泉の発展につくした 洞爺湖電気鉄道

洞爺湖の西岸・東岸で産出された
鉱山資源は船で湖を渡り、
洞爺湖温泉で洞爺湖電気鉄道につみかえられ、
虻田駅 (現在の JR 洞爺駅) へ。
さらにそこから鉄道で
陸路・室蘭へと運ばれた。
温泉発見後は電気鉄道に乗って
大勢の観光客がこの地を訪れた。



四十三山の山腹
13カ所から噴煙が立ちのぼる。
金比羅地区から撮影

旧洞爺村から見た有珠山全景



1910年
明治新山と温泉誕生

洞爺湖周辺が「温泉のまち」になったのは、1910(明治43)年の噴火から。地下のマグマがぐぐぐと地面を170m盛り上げて、明治新山(四十三山)ができあがりました。そのときのマグマが地下水を温めて、あの、あったか〜い温泉に。

洞爺湖温泉は1917(大正6)年に発見され、当初は床丹温泉と呼ばれた。



発見直後は2軒だった温泉旅館も電鉄の発展とともに増えていき、あたり一帯がにぎわった。

アプタ・コタンに住むアイヌの人々による鎮火祈願の記録も残る。



コラム

噴火を伝える人々



1910年
東京の新聞記者
この男性は1910年8月1日、東京から取材に来た東京日々新聞社の特派員。噴火の話題だけでなく、アイヌの人々の暮らしなど当時の虻田村の様子を詳しく誌面で紹介したそうです。



噴火口の周辺にまでせまった報道は、今では決して珍しくないらしい。

1977年 子ども目線の広報誌

「広報あぶた」1977年10月20日号の表紙では、小学生の作文をのせています。二回目の大きな噴火について「石と灰が降ってきて、ガードレールに石がぶつかって、カンコン、カンコンと鳴りました」



1943~45 (昭和18~20)年の火山活動によりできた昭和新山



1982(昭和57)年、有珠山での親子ハイキング。有珠山の安定期には多くの登山愛好家や観光客が訪れた。

1944年
戦中生まれの昭和
新山

有珠山の存在を全国に広めた昭和
新山の誕生。
有珠山ロープウェイの展望台から
そう大な眺めにみせられて、
毎年たくさんの方が訪れています。



1977(昭和52)年の噴火前、有珠山外輪内には牛の放牧場や蓮の花が咲く銀沼があり、遠足やハイキングの人気スポットだった。

1977年 灰におおわれた温泉街

貴重な資料が数多く残っている
1977(昭和52)年の噴火。
同じ噴火でも、住む場所によって
受け止め方はさまざま。
みなさんのご家族にも、
「あのとき」の思い出を
聞いてみてくださいね。

大勢の報道関係者がここから撮った光景
を全国に発信した。



湖上には温泉地区から避難してきた観光遊覧船が見える。
ひなん



湖畔に積もった火山灰の除灰作業
こはん

住宅街の背後に立ちのぼる噴煙



火山灰が降りそそぐ温泉街



泉地区から噴火湾側に
馬を連れて避難する人もいた。



各地から見た噴火の様子



キャンプ場に遊びに来ていた人たち。対岸では噴火が続いた。



海上保安庁の巡視艇が見守るなか、海の上からも噴火が目撃された。

4月1日、温泉地区の金比羅山中腹からも噴火が始まった。



香川地区から見た光景

操業していた漁師さんの声

「噴煙を見ながらの海上作業だったので、いつ作業を中止して避難しなければならぬのか」という不安と緊張の連続でした。」

2000年(平成12)年の噴火では、1977年の教訓が生かされ、噴火当日よりも前に避難指示が発令されたため住人の事前避難が無事に行われました。

2000年
教訓が生きた避難体制

現場にかけつけた消防団員の声

「消防団に招集がかかり、町の様子を見てまわったとき、緑石の盛り上がりを見つけて自然の驚異を感じました。」



3月31日、西山山麓から噴火。本町から撮影



写真が語る2000年ドキュメント.1

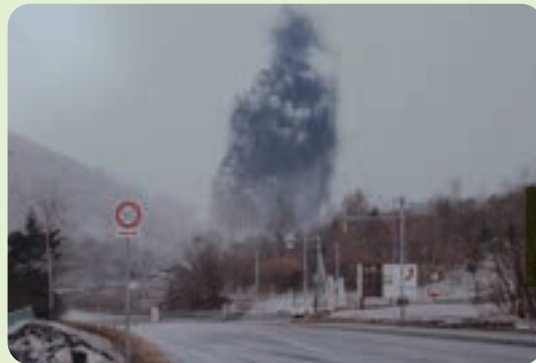
現場で作業していた役場職員の声

「噴火当日の早朝、災害対策本部から水道管破裂の知らせを受け、作業員とともに現場に急行し、復旧作業に取りかかりました。前回噴火の2年後、昭和54年から水道の災害復旧にたずさわった経験から「はじまったか…長いたかになるだろうなあ…」、そう思いながら作業を続けていました。」



ショベルカーが地中に？
どうしてこんなことに？

火口付近はいま、西山山麓火口散策路に。
噴火のあとを間近に感じることができます。



同日午後1時7分、西山山麓から噴火



修理を完了した直後に噴火が始まり、危機一髪、皆が避難。噴火活動がおさまってから戻ってみると…ショベルカーもアパートも噴出物に埋もれてしまっていました。

2000年3月31日午前7時、町道「泉公園線」沿いのアパートから水道管が破裂したとの通報があり、工事を開始した現場がありました。





2007(平成19)年には、2本のトンネルで温泉地区と清水間を結ぶ新ルートが完成。緊急時には避難道路の役割も果たします。

現在



今は緑がしげり、静かな時間が流れています。

写真が語る2000年ドキュメント.2

噴火前



2000年噴火による大きな被害のひとつに、国道230号の寸断がありました。写真上は噴火前の国道230号

噴火後



地盤の隆起によって階段状に破壊された国道



1977年の噴火前



温泉地区の湖岸

1977年の噴火直後



噴火の1カ半月後、整備が進む月浦地区

1977年の噴火後



歩きやすい遊歩道が整備された。

1977年の噴火後



湖岸に埋めた火山灰の上に桜が植えられた。

2014年



遊歩道の途中にある噴水広場は子どもたちの遊び場に。

2014年



開花の季節にはドライバーの目を楽しませている。

2015年3月、洞爺湖町「旭浦バス停」前の湖岸から撮影した有珠山全容



変動する大地
今昔の写真で読み解くまちの変化



旧洞爺村の高台地区では1973（昭和48）年から1987（昭和62）年ごろの間、国や道による大規模な土地改良事業が行われた。当時の農林省は本道を日本最大の食糧供給基地とし将来を描き、新しい農業をスタートさせた。



1977年の噴火前

火山灰は田畑にも降りそそいだ。



1977年の噴火後

トラクターで表面の火山灰を地中にすきこむ反転作業が行われた。



2014年

ジャガイモやカボチャなどのおいしい地元野菜は、道の駅の直売所でも人気モノ。



1977年の噴火前

洞爺地区、ポン錦川河口のつり人をパチリ。昭和30～40年代は大型のコイやニジマスがよくつれた。

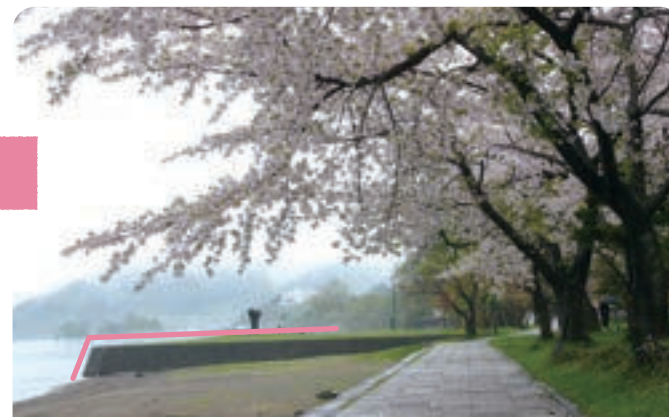


1977年8月の洞爺地区。火山灰が降り積もった市街地の除灰作業



1977年の噴火後

火山灰は湖岸に運ばれ、盛り土ができた。



2014年

湖岸の盛り土はいま、とうや小公園に姿を変えた。洞爺湖畔に点在する彫刻が景色にとけこんでいる。

1930(昭和5)年、洞爺湖温泉町で開校。



洞爺湖温泉小学校



1977年の噴火後、校舎は移転。2000年噴火の熱泥流によって被災したため現在は月浦地区へ移転した。

1977年8月の有珠山噴火と翌年10月の泥流災害によって、洞爺湖温泉浄水場は壊滅的な被害を受け、泉地区高台に移設した。

浄水場



洞爺湖水と泉地区の湧水を水源として配水されていたが、2000年の噴火で両水源共に被害を受けた。

災害復旧で最も大切な「水」。噴火により何度も場所を変えて、水道水を確保してきた。現在、本町地区・温泉地区・月浦地区・花和地区は洞爺湖の湖水を、洞爺地区は湧水深井戸を水源として利用している。

住宅



今は散策路が整備された砂防指定地内に保存されている。



温泉地区の桜ヶ丘団地は2000年の噴火時、泥流と噴石により被災した。



虻田発電所は1939(昭和14)年から運転開始。電気は主に室蘭の製鉄鋼業所に使われていた。洞爺湖からの距離が近く、落差約64mを利用した水力発電が可能^{しせつ}な施設であり、歴史的にも土木建造物としても高い評価を得ている。

洞爺湖は生活水や電気の源として、私たち住人の暮らしに欠かせない存在だ。



第4章

私たちの暮らし
そこに湖と火山がある日々の営み

生活・施設

産業



観光
と
暮らし

洞爺地区にある「温泉スタンド」は北海道でもめずらしい温泉の自動販売機。1986（昭和61）年から始まった。



1929（昭和4年）ごろの湖上遊覧。長輪線や電鉄線により栄えた洞爺湖温泉では、5～6月になると修学旅行生など道内外の団体客が湖上遊覧を楽しんだ。



鉱業

1905（明治38）年に虻田鉱山（写真上）が、1934（昭和9）年には洞爺鉱山が採掘を開始。主要産業のひとつだった。

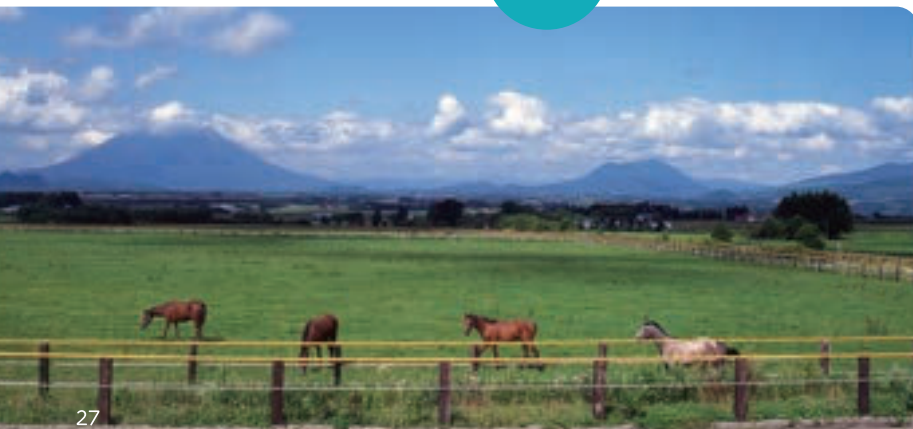
1941（昭和16）年の田植え。扇状地の財田地区は米どころとして知られている。



2歳時から4年連続のGI制覇という偉業を果たしたメジロドーベル



農業



半世紀にわたるメジロマックインなど数々のGI馬を輩出した、かつてのメジロ牧場。その伝統は今も地元で受けつがれている。



漁業

1937（昭和12）年ごろ、漁業の主役はイワシからマグロに移行。写真はイワシ船でのマグロの沖揚げ。一回の漁で190kg前後のマグロが20～30本とれたという。



噴火湾のホタテ漁は古くから盛ん。縄文遺跡でも貝がら出土している。



商工業

明治時代、旧虻田町で盛んだった亜麻産業。収穫された亜麻は軍手などの原材料になった。



1928（昭和3）年の長輪線（JR室蘭線）開通後、虻田駅（現洞爺駅）周辺のまちなみは一変。1931（昭和6）年には商店の有志約50名が集まり、虻田町商工会が設立された。写真は1932（昭和7）年ごろの駅前通り

私たちのふるさとをいま、見つめ直す

未来につなぐ
ジオの恵み



本町地区 2014 (平成26) 年

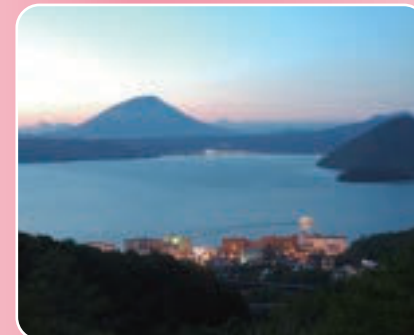


1960 (昭和35) 年ごろ

温泉地区 2006 (平成18) 年



1960 (昭和35) 年ごろ



洞爺地区 2011 (平成23) 年



1960 (昭和35) 年ごろ

ジオパークに暮らす

「洞爺湖有珠山ジオパーク」に暮らす私たちは
大地からの恵みを受ける喜びと
自然をうやまう気持ちを知っています。

子どもたちに伝えたい、
忘れられない記憶と未来に備える知恵の大切さ。

愛する人たちと、ふるさとのこと、
いっしょに語り合ってみませんか。

編集にあたり多くの町民の皆さんにご協力をいただきました。



平成 27 年 3 月発行 / 洞爺湖町・ジオパーク推進課